

南北間の協力

いっしょに持続可能な開発を

Netting the ether
Eco-Minds

Trading futures
Widening horizons

LIVE 8 ... the best thing we could ever do

Rapid power
Seeds of change

HOLMES' FIRE





TUNZA

～「TUNZA」とは、スワヒリ語で“愛をこめて大切にみつかう”という意味です～

TUNZA

英語版は、インターネット上でも見ることができます。

→www.ourplanet.com

<英語版>

United Nations Environment Programme (UNEP)

PO Box 30552, Nairobi, Kenya

Tel (254 20) 621 234

Fax (254 20) 623 927

Telex 22068 UNEP KE

E-mail: cpinfo@unep.org

www.unep.org

Director of Publication Eric Falt

Coordinator Wondwosen Asnake

Editor Geoffrey Lean

Guest Editor Caroline Ang

Nairobi Coordinator Naomi Poulton

Circulation Manager Manyahleshal Kebede

Youth Contributors Lars Rosendahl Appelquist, Denmark; Gerard Dumancas, Philippines; Wang Feng, China; Oliver Goh, Singapore; Laura Kirby, UK; Carmen LaCambra, Colombia; Shan Khee Lee, Malaysia; Sixuan Li, China; Juan Ortiz, Peru; Nyoman Sutarsa, Indonesia; Callum Swift, UK; Malika Yarmatova, Uzbekistan

Other Contributors Lelei Lelaulu, Counterpart International; Rosey Simonds and David Woollcombe, Peace Child International; WWF International; Dame Kelly Holmes

Design Roger Charles

Web Editor Graham Barden

Production Banson

Head, UNEP's Children and Youth/Sport and Environment Unit Theodore Oben

Front cover Marifel Modiano

Printed in the United Kingdom

<日本語版>

編集兼発行人:宮内 淳

編集・発行所:NPO法人地球友の会

東京都中央区東日本橋2-11-5 (〒103-0004)

電話03-3866-1307 FAX 03-3866-7541

翻訳者:(株)ジャパンブリッジ 大津佳代 河西路子

翻訳協力者:Jon & Chris Corporation (U.S.A.)

監訳:高林久美子(白鷗大学講師)

石倉久之(自治医科大学名誉教授)

デザイン:Roger Charles

制作:(株)セントラルプロフィックス

印刷・製本:(株)久栄社

協力:東京都中央区

UNEP国際環境技術センター (IETC)

Printed in Japan

*「TUNZA」日本語版は、日本語を母国語とする人々のために国連環境計画(UNEP)に代わって出版するもので、翻訳の責任はNPO法人地球友の会にあります。

*本誌の内容は、必ずしもUNEPおよび編集者の見解や政策を反映するものではなく、公式な記録内容でもありません。また、本誌で採用されている名称ならびに記述は、いかなる国、領域、都市やその当局に関する、あるいはその国境や境界線に関するUNEPの見解を示すものではありません。

*本誌の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

*本誌は非売品です。

この印刷物は、「大豆油インキ」を使い、ISO14001認証工場において「水なし印刷」で印刷しています。また、省資源化(フィルムレス)に繋がるCTPIにより製版しています。本誌は再生紙を使用しています。



- 3 ぼくたちの瞬間…
…ぼくたちの時代
- 4 “われわれにできる最善のこと”
- 6 企業家のエネルギー
- 7 急流が生み出す力
- 8 視野を広げて
環境を大切に思う気持ち
- 10 TUNZAが答えよう
- 11 ほんとうの温室効果
- 12 いっしょに持続可能な開発を
- 14 熱意あふれるホームズ
笑顔のごほうび
- 16 南北が協力すれば…
- 17 未来の貿易
- 18 天空にかかるネットワーク
- 19 発明の父
- 20 変化のタネ
健康を大切に守ること
- 22 7つの不思議
- 24 明日の世界はどんなだろう？



UNEP/Lars Astrom



www.unep.org/energy/projects/REED



Writhlington School

UNEPは、ドイツに本社をおくヘルスケア・農業関連・素材科学の世界的企業バイエルと連携して、若者の環境意識を高め、子どもたちや青少年が環境問題に関心を持ってくれるよう活動しています。

これまでアジア太平洋地域で10年近くにわたり、いくつかのプロジェクトを協力して行なってきたUNEPとバイエルは、パートナーシップ契約を結ぶことで、現在進行中のプロジェクトをステップアップし、他の国々にも

その成功例を広げ、若者のための企画を推進していけるようになりました。それらのプロジェクトには以下のものがあります。機関誌「TUNZA」; 国際子供環境絵画コンテスト; UNEPとの共同によるバイエル青年環境大使; UNEP・TUNZA国際青年会議; アジア太平洋青年環境ネットワーク; アジア太平洋エコ推進フォーラム; ポーランドのエコフォーラム; 東ヨーロッパでの写真コンテスト「エコロジー・イン・フォーカス」



Partners for Youth and the Environment





www.facewa.com

17



Jorgen Schyfte/Still Pictures

18



web. media.mit.edu/neilg/nel

19



J. Griesbach

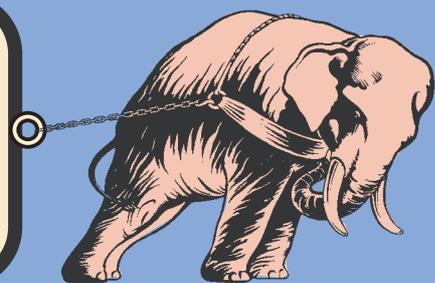
20



Donna Sheppard, Calgary Zoo

22

ぼくたちの瞬間…
…ぼくたちの時代



Editorial

はじめに

“貧困を過去のものにしよう”というスローガンは、世界中の人々、とくにわたしたちの世代の心をとらえました。世界中の若者は、アフリカの子どもたちが3分に一人ずつムダな死に方をしているような極度の貧困状況を、この世代で終わらせることができると強く信じています。ロックスターのボノ(U2)は、「今こそぼくたちの瞬間、ぼくたちの時代だ。これは、正しいことのために立ち上がるチャンスなんだ」と、この夏のライブ8コンサートで呼びかけたのです。

しかし、貧困を過去のものにするという事は、間違いなく必要不可欠ではあるものの、わたしたちの世代が直面する課題の半分にすぎないのです。貧困は、まさに汚染の最悪の形ですが、この世界は、種や生態系の急激な損失、大切な表土におそろしいまでに広がってゆく浸食、そして中でも地球温暖化の高まる脅威といった、その他たくさんの未来への危機に直面しています。

世界が環境と調和しながら発展しないかぎり、貧困はなくなりません。わたしたち以上の数をしめる貧困層の人々が生き残れるかどうかは、淡水、作物がよく育つ土壌、そしてきれいな空気のような、絶対に必要な自然環境にかかっているのです。気候変動は、わたしたちみんなをおびやかすものですが、これは干ばつや飢饉を増加し、海面を上昇させて、とくに貧しい人々に最大のダメージを与えるのです。開発を続けていくつもりなら、それは持続可能なものでなくてはなりません。

“持続可能な開発を未来に”というスローガンは、“貧困を過去のものにしよう”と同じ調子では語れません。たぶんTUNZA読者の中のだれかが、このスローガンが世の中の人々の心をとらえるように、気のきいた方法を見つけ出す必要があります。けれども、この2つの目標は切り離せないものであり、価値ある未来を世界にもたらすには、両方の目標をこの世代で達成しなくてはならないのです。わたしたちは、両方の目標とも達成するために、できるすべてのことをやると誓います。そして、わたしたちの指導者も同様に実行してくれると期待します。

みなさんの意見、情報、
考えを聞かせてください！
E-mail : tunza@ourplanet.com

これまでになく地球の北と南の、つまり先進国と途上国のあいだの協力が、世界の指導者たちの最優先課題になってきている。それが驚くほど大規模な広がりを持ち、そこでは若者たちが重要な役割をになっている。

それは、スコットランドのグレンイーグルズで山場を迎えることになった。7月第1週の終わり、世界でもっとも裕福な国々の指導者たちが、年に1度のG8サミット(主要国首脳会議)で初めて、地球温暖化とアフリカの貧困に関する問題を主要議題とした。もうひとつの初めてのこととして、おもな開発途上国の指導者たちが協議に参加するよう招待された。

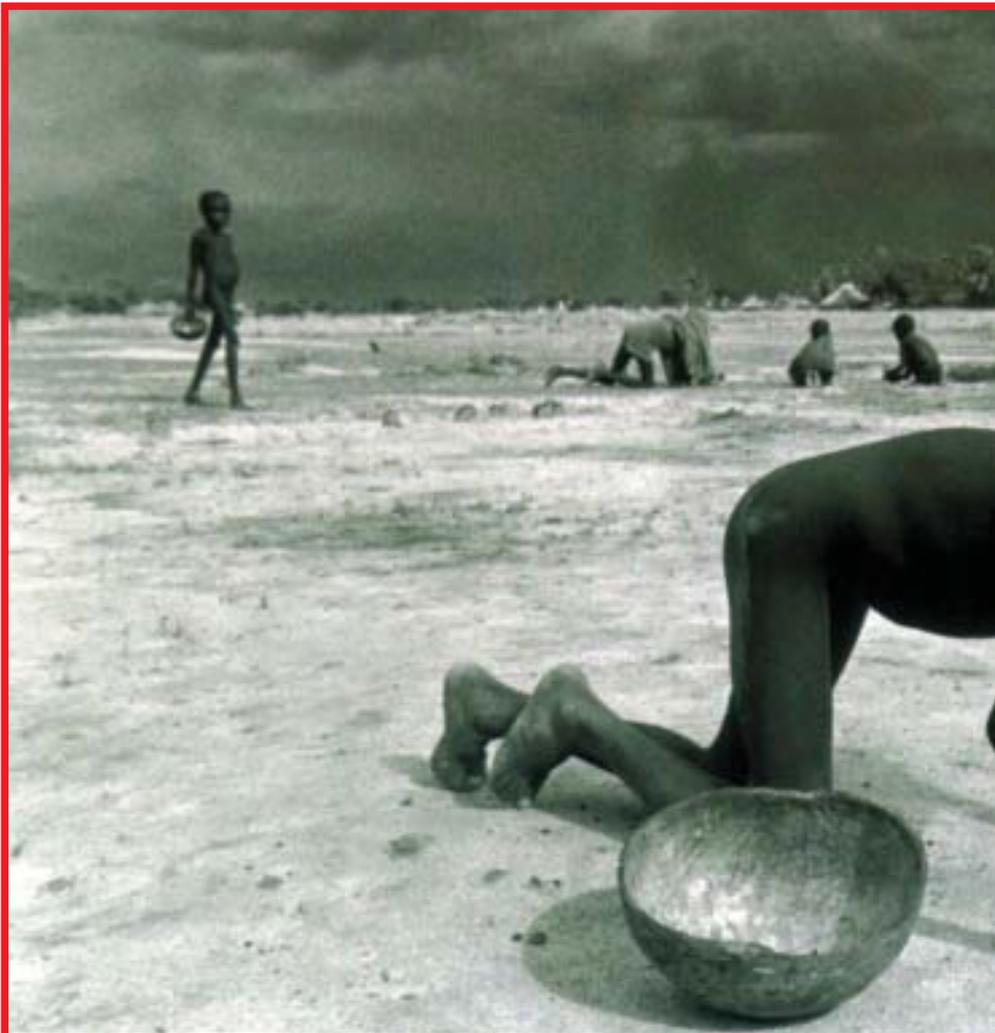
会合の直前には、世界最大の国際的なロックフェスティバルがあり、彼らの耳の奥ではその音がまだ鳴り続けていた。サミット前の土曜日に、世界10ヵ所(ベルリン、ヨハネスブルグ、ロンドンのハイパーク、モスクワの赤の広場、パリ、フィラデルフィア的美術館、ローマのサーカスマキシマス、そして東京など)で行なわれたライブ8コンサートは、変化の大きな必要性を音楽でうたえた。

ロックスターのボノ(=U2のヴォーカル)とボブ・ゲルドフの企画によって、コンサートにはポール・マッカートニー、スティング、スティービー・ワンダー、エルトン・ジョン、アンジェリーク・キジョーのような伝説のアーティストに加えて、マドンナとネルソン・マンデラや、ビル・ゲイツとスヌープ・ドッグのような異色の組み合わせも実現した。そして、アフリカの貧困に対して支援する行動を起こすよう要求したのだ。

コフィー・アナン国連事務総長は、世界中で見ている何億もの人々に、「これこそが国際連合です…全世界が貧しい人々と結束をかためています」と語った。そして、「われわれには、こういうことができるのです。これは、かつて人間が行なってきたことの中で最良の行動になるでしょう」と、世界でもっとも裕福な一人であるビル・ゲイツは付け足した。



UNEP/Lynda lee Howland



UNEP/Hartmut Schwarzbach

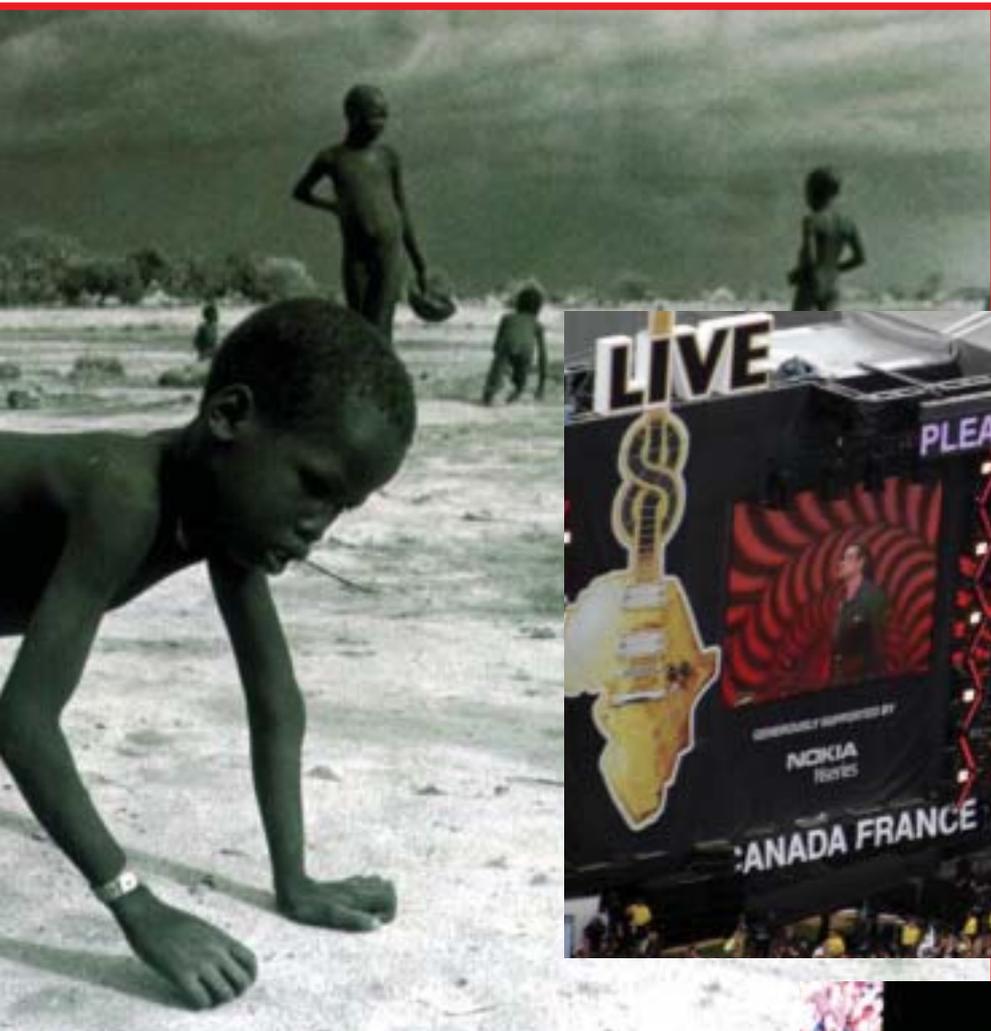
“われわれにできる最善のこと”

数日後、事務局は3,800万人が署名した嘆願書をグレンイーグルズ・サミットに提示した。そうしたプレッシャーもあって、G8の指導者たちは、ホストであるイギリスのトニー・ブレア首相が特に力を入れたこれらの議題に注目し、その結果、活動家たちが望んだほどではなかったが、この問題はかつてない前進を成しとげたのだった。

G8の指導者たちは、開発途上国全体への支援を2010年までに500億ドル追加するとともに、18ヵ国(それ以外で指導者たちによって定められた条件を満たした場合は35ヵ国まで増加)のすべての債務を取り消し、南の国々の経済にマイナスとなりがちな先進国の輸出助成金を廃止することに合意した。しかし、これらの合意はまだ不十分と言える。なぜなら、約60ヵ国が債務救済を必要としているし、国連は、追加支援額はこの2倍で緊急のものであるべきだと言っており、しかも助成金廃止の日時も決められなかった。それでも今回の決定は、世界中の裕福な国々の指導者たちによる唯一最大の動きだった。

気候変動については、あまり進展がない。しかしG8の指導者たちや、ブラジル、中国、そしてインドのような主要な開発途上国の指導者たちは、地球温暖化への取り組みについて話し合いを始めることに合意した。それは、2012年に京都議定書の効力が終了した時にとるべき行動について、あるいは世界の意見が一致するかもしれないという希望を、初めて人々に抱かせてくれたのだった。

期待はずれの点はあったが、少なくとも四半世紀の中で初めて、変化に対しての強い意気込みがみられた。そしてすべては、これから数ヵ月のあいだにある3つの重要な会議にかかっている。



LIVE 8



topfoto / national

‘The best thing we could ever do’

9月には、世界各国の指導者たちが、2015年までに極度の貧困を半減するという目標をふくむ「ミレニアム開発目標」の進展を見直すために、ニューヨークに集まる。11月には、モントリオールできわめて重要な会議が開かれ、そこで地球温暖化への次の段階の取り組みについて交渉が始まる。そして12月には、世界貿易に関する重要な協議が香港で行なわれる。

これら3つの会議は、南北間の協力をめざす新しい動きの正念場となるだろう。また、ライブ8や“貧困を過去のものにしよう”といったことに関連するキャンペーンを支援した数えきれないほどの人たちが、成果が得られるかどうか、注目して見守っていることだろう。



topfoto / uppa

上: エジンバラのライブ8でのミッジ・ユーロ、ボノ、ボブ・ゲルドフ
下: (左) 国連のコフィー・アナン、世界銀行および国際通貨基金の代表と、G8およびアフリカの指導者たち (右) G8議長をつとめたイギリスのトニー・ブレア首相が、アフリカの人々から何千ものメッセージを受け取る



Empics



topfoto / fotanews

「エネルギーなしで、できることってありますか？
何も……何もありません」

アメリカの作家マーク・トウェインは正しかった。われわれはみな、暖房、運送、栄養、衛生、健康、そしてその他の要求を満たすために、エネルギーを必要としている。でも、エネルギーをどのように手に入れるかは、われわれがどこに住み、いくら支払えるかしだいである。

裕福な国の人々は、コンセントから電気をとったり、ガソリンを給油したりすることで電気製品や機械や乗り物を動かす。開発途上国では、20億人以上の“エネルギーに飢えた人々”が、照明、暖房、調理のために、木炭、まき、牛のフンを燃やしている。これらの燃料集めを行なうのは圧倒的に女性や子供たちが多く、たいいてい時間のかかる、とても疲れる作業になる。こういった時間は、本来であれば学校での勉強や、もっと生産性のある仕事のために使えるはずなのだ。それに燃料を燃やす際に出る煙は、1年間に何百万人もの命をうばっている。

UNEP/Ong Hoooi Gin



クリーンで再生可能な資源

増大する人類のエネルギー需要を、環境にやさしく持続可能な、そしてためになる方法で満たすことは、大変な挑戦だ。地球温暖化を加速させずにこのような需要をまかなうための、クリーンで再生可能な資源の開発が不可欠だ。

専門家によると、電気のない生活をしている人々にクリーンな動力を供給するためには、少なくとも6万社の新エネルギー会社が必要だという。地域の企業家を支援して、貧しい人々のニーズにマッチした、しかも彼らが喜んで対価を払うようなエネルギー供給サービスを実現することができたとしたら、そのコミュニティは自力で地域経済を発展させることが可能になる。

天日干し乾燥の食品

マリ共和国のバンバ・コウリバリーは、このような企業家の一人である。UNEP（＝国連環境計画）主導のREED（＝農村地域のエネルギー企業開発）に協力する団体からの融資で、肉、果物、野菜を保存加工するために、天日による乾燥技術を利用する会社を始めた。気候のために食べものが

Entrepreneurial energy 企業家のエネルギー

すぐ腐ってしまうのに、ほとんどの人々は冷蔵庫を買う余裕がない——そんなこの国で、この会社が重要なすき間を埋める役割を果たしている。彼の会社の乾燥肉、乾燥マンゴー、乾燥タマネギは、今では首都バマコジゅうの食品店、ガソリンスタンド、露店で見つけることができる。

太陽エネルギーを使った灌漑

ブラジル北東部では、地方農家たちの新しい生産組合が、太陽熱を利用した送水ポンプによって水をまいて有機農産物を育て、セアラ州都のフォルタレーザで販売している。REEDがスポンサーとなっているこのプロジェクトのおかげで、仕事の口ができ収入も増えたので、人々は都会へ移住する必要がなくなり、地元に残るようになった。

バイオガス・クッキング

Vacvina、つまりベトナム複合農業者同盟は、動物の排せつ物（一般的な小規模農家で飼われている1～2頭の豚からのもの）を、家庭で食事をつくるのにじゅうぶん量のメタンガスに変える家庭用バイオダイジェスターを、1台40ドル（＝約4,500円）で販売している。REEDにおけるUNEPの主要パートナーのひとつで、独立企業であるE+Coが出資し、このプロジェクトは、国内のあちらこちらの村で3,000以上のバイオガスシステムを販売・設置している。そして、まきを集めるのに費やしていた時間を自由にし、室内空気汚染を減らし、健康を改善している。



www.uneptie.org/energy/projects/REED



動物の排せつ物から出るメタンガスは、クリーンな再生可能燃料として吸収し、利用できる。



photos: Joost Siteur



Leanna Rathkelly / UNEP / Still Pictures

RAPID POWER 急流が生み出す力

壮大なコンゴ川は、コンゴ民主共和国全土を勢いよく流れる。あるところでは、たった14Km流れるあいだに96mもの落差がある。この部分のインガ急流にはダムがひとつあって、ルワンダ共和国、南アフリカ共和国、ザンビア共和国、ジンバブエ共和国にすでに電気を供給しているが、南アフリカの国営電力公社エスコム (Eskom) は、もっとたくさんの電力を提供できると考えている。

エスコムは、インガ急流の潜在力を利用して世界最大の水力発電プラントをつくり、大陸のいたるところに電気を送ろうとしている。500億ドル(=約5兆7,000億円)の大インガ計画は、中国の三峡ダムさんきやうの電力量の2倍にあたる約4万メガワットを発電することになる。ところが、大きなダム建設によってしばしば起こる環境や社会的な問題をさけるために、エスコムは川にダムをつくるのではなく、サイフォン(=吸い上げ管)で吸い上げられた水を発電機へと導き、再び川へ水を戻すといった“流れこみ式発電”により、この膨大な電力量をつくりだそうとしている。

プロジェクトの提案者たちは、その電力をアフリカ全土に供給し、残った電力については、地中海を越えてイタリア、ヨルダン、スペイン、その他の国に輸出することを期待している。大陸を横断して結合した配電網を築くために、アフリカのばらばらの供給ラインをつなげていく計画は、すでに始まっている。

この計画が成功するかどうかは、国境を越えた紛争や、長距離の送電により電力が損失する問題などを解決すること、多種多様な生物種に恵まれた地域環境を維持すること、資金を確保することなどにかかっている。そして、たとえすべてが予定通り進んだとしても、大インガの建設は、少なくともあと10年先のことだ。

しかし、エスコムのリーダーたちは楽観的だ。このプロジェクトについて、南北間の協力がすでに始まっている。フランスの電力公社 (Electricité de France) による調査では、計画は実行可能なもので、世界銀行のような資金提供元や、個人投資家たちも興味を示し始めている。エスコムのCEO(=最高経営責任者)であるスラニ・グカバシェ氏は、「近い将来、何億ものアフリカの人たちが、家の中を明るくしたり、食事をつくったりするのに電力を使うようになって、彼らの可能性を広げる文字通りの“力”を手に入れるだろう」と信じている。

視野を広げて

New perspectives 新しいものの見方

Carmen LaCamba



カルメン・ラカンブラさんは、「学問としての科学と実際に開発に応用できる科学とのあいだのギャップをうめる」ために、コロンビアからイギリスのケンブリッジにあるUNEP世界自然保護モニタリングセンター（UNEP-WCMC）にやってきた。研修中の生物学者としてラカンブラさんは、UNEP-WCMCへの1年間の留学のため、ブリティッシュ・カウンシル（＝英国の国際文化交流機関）よりチーヴニング奨学金（Chevening Scholarship）を与えられたのだ。カルメンさんは、「ここでは、経験を通じてキャリアを積むと同時に、帰国してからもずっと続くいろいろなつながりを持つことができます。それに、心を開いて積極的にバランスのとれた協力関係を受け入れるようになります。そして、センターはわたしたちを支援してくれますが、わたしたちはそのお返しとして、自分たちの知識を通じて貢献します。北では環境保護が政治的な動きになっていますが、保護すべき多様な生態系は、南の国々にあります。北と南が環境保護を同時に全体として進展させるには、情報交換、能力開発、そして共同科学研究などを通じて、おたがいに協力していかななくてはなりません」と言う。

もう一人のチーヴニング奨学生、マレーシア出身のシャン・ケー・リーさんは、次のように付け加える。「WCMCに来る前、ボルネオ島北部で現場研究員として働いていたわたしは、地域レベルで社会や動物たちとかかわりを持ってきました。けれどもわたしは、地球規模の環境保護を実際に見たい、そして帰国後に同僚たちとわかちあえる技術力を習得したいと思っていました。ケンブリッジでは、世界中の研究員たちと話しあったり、情報や知識を共有したりする機会があります。それは地元での活動に意味を与えてくれるし、わたしがマレーシアに戻り、再び地域レベルで働く時に大きく役立つでしょう」。



Shan Khee Lee



環境を大切に 思う気持ち

建設用材の70%がココナツの木からつくられているマニラのココナツ宮殿は、最初のエコマインド青年フォーラム（UNEP・バイエルパートナーシップにより設立された最新の青年環境プログラム）の第1回目の歓迎ディナーにふさわしい場所だ。

持続可能な開発のために、科学、社会学、技術をいかに創造的かつ実用的に利用するか。これは、2005年10月にオーストラリア、中国、インド、インドネシア、韓国、ニュージーランド、フィリピン、シンガポール、タイから選ばれた27人の青年代表が集まる会議の最優先議題となるだろう。フォーラムで焦点となるのは、さまざまな学問を学び、異なる開発段階にある国々から来た青年たちのアイデア交換をうながすことである。

マニラでの3日間の講義と討論のあと、プログラムはスービックへと場所を移す。そこで代表たちは、森に入り、先住民ガイドによる薬草や水生植物、火のつけ方、竹製の道具や調理器具に関する実地講習会を受ける。その後、もっとも大事なこととして、代表たちはその地域の実際の環境問題に取り組むため、自然科学、工学技術、社会科学、商業および経営の専門的知識を結合させたチームを形成する。

バイエルAG社の革新・技術・環境を担当する役員であるウド・オエルス博士は、次のように語る。「持続可能な開発といったグローバルな仕事は、われわれみんなにとっての挑戦です。そこでは科学や技術がきわめて重要な役割を果たし、多くの学問分野にまたがる協力が、持続可能という考えを現実のものにできるのです。つまり、Eco-Mindsは、広い範囲の国籍や学問を代表する若者たちを団結させるための大切な公開討論の場なのです」。

Bayer



中国、インドネシア、フィリピン、シンガポールからのEco-Minds参加者は、フォーラムに対するそれぞれの期待と、若者たちの持続可能な開発への参加が各国の環境保護に何をもたらすかについて、TUNZAで語った。

Widening horizons

Peer networking 仲間たちのネットワーク

LEAD International

持続可能な世界のために次世代のリーダーを



ワン・フェン君 (中国/南京大学環境計画管理/大学院生)

「Eco-Mindsは、いろいろな経歴や経験を持つ人たちと交流できる貴重な機会を与えてくれる。ぼくは世界の若者たちが、環境を守るために毎日の生活の中でどんなことをしているかを知りたい。そして、彼らにも中国では何が起っていて、政府、一般の人たち、そして企業がどのようにこれらの問題に取り組んでいるかを伝えたい。……今こそ、若者が力をあわせ、地球のために計画をたてていく時なんだ」



ニョマン・スタルサ君 (インドネシア/医学生)

「最近では、ぼくたちの国の開発は、ひとつのことを改良していきながら、同時にもうひとつのことを犠牲にしている。環境を管理することは、教育や医療の問題のバランスをとることも含むと思う。ぼくはEco-Mindsプログラムのために選ばれたのだから、インドネシアのこのような相互関係を持つ問題への意識を高めていくよ」



ジェラルド・ドゥマンカス君 (フィリピン/化学科新卒生)

「年を重ねた経験のある大人たちは、国の開発のために何がいちばんいいのかわかりやすくて見分けることができる。だから、そういった大人たちにこそ、もっと発言の機会を与えるべきだ、というのが多くの人々の考え方だ。このことは正しいのかもしれないけれど、若者として、ぼくたちも国にとっていいことに貢献したい気持ちと感情を持っているんだ」



オリバー・ゴウ君 (シンガポール/建設環境工学科/大学生)

「このフォーラムを通して感じたことは、学ぶ意欲を持ち、知識を交換し、学んだ教訓を国に持ち帰って、仲間たちにそうした環境メッセージを広めたいと伝える情熱に燃えた若者たちのあいだからこそ、有益な議論がかわさるというところだ。ぼくたちそれぞれをドミノのコマにたとえると、ドミノ効果のようになるだろう。つまり、たがいにふれあうことで影響力の輪が広がる。最終的には、環境に対する情熱が以前よりずっと大きなものになるだろうね」



Counterpart International

Advocates for the future 未来への代弁者

国際的な人材育成団体であるカウンターパート・インターナショナル社は、ウズベキスタンで国際金融、ビジネス倫理、社会的責任を通じて新興成長市場を発展させようと研究を続ける、マリカ・ヤルマトヴァさんを支援してきた。彼女への奨学金は、カウンターパート社のかかげる“サービスとパートナーシップで公正な世界を実現する”という目標にそって、南における地域能力の構築と支援をねらったものである。カウンターパート社の代表取締役社長レイ・レラウル氏は、ヤルマトヴァさんに「彼女は学生自治会の代表をつとめ、失業者のためのクラスを運営し、7万語の英語ーロシア語ーウズベク語のオンライン辞書の編集を手伝った」、「一生懸命に働き、ほかの人たちと自分のアイデアを共有し、挑戦するのをおそれないこと」と強くうたえ、「あなたには、未来を形づくり、変化を提唱し、導き、真の持続可能な未来を築く手助けをするだけの力があります」と付け足した。

TUNZAが答えよう

North-South partnerships 南北間の協力

Q わたしたちは、限られた自然資源を同じところから分け合っているのですから、環境と開発の問題についての南北間の協力は、絶対に必要です。このような考えが国際的な協議事項としてあげられるまでに、どうしてこんなに時間がかかったのですか？

A ここまで来るのは時間の問題だった。現在われわれは、それぞれ違う世界に住んでいるが、ひとつのものの見方として、貧しい人たちと裕福な人たちのあいだで増え続ける不平等、自然資源の乱用、気候変動や人口増加、ひどい貧困による影響などを、はっきりと見ることができる。だから、いまやそうした問題を、考え方の違いによって無視することはできない。

Q 言語、文化、資源の違いを考えた上で、南北の若者たちは共通の目標に向けて、どのように力を合わせていくことができますか？

A 現代の若者たちは、異なる言語を話したり学んだりする能力を持ち、おたがいの文化の多様性を正しく理解し取り入れることで、地球市民になれる。南北の若者たちの協力は、新たな可能性を示すもので、交流プログラムやその他の形態による結束を通じて教育、研修、能力開発の機会を生み出すんだ。

Q たくさんの南北合同プロジェクトが、個々の意志の衝突、伝達ミス、資金や調達面での困難などから抜け出せない状態におちいつているようです。成功する協力関係を築き、維持していくのに重要な要素として、どのようなものがありますか？

A 決まりきったやり方というのはないが、協力関係が地元の状況に取り組むための真剣な努力のもとで築かれているのであれば、衝突や誤解をさけることができる。水、食べもの、衛生設備、保護施設、あるいは教育へのアクセスを提供することが目標であるなら、協力関係には、はっきりとした行動計画、指導力、日程、資金源、それにもまして活発な関係者の参加が必要だ。関わっている人たち全員が、おたがいの声に耳を傾け、必要なものや違いを理解して、やらなくてはいけないことを単純に、時間のかかるお役所的な手続きをできるだけなくすようにすれば、持続的な協力関係を築くことができる。

Q 多くの南北間の協力は、単に開発途上国支配政策の新しい形にすぎないのではないのでしょうか？

A 協力が強制されたり、一国の考え方や見方がほかの国々に押しつけられたり、あるいは一方の国の利益のみを追求したにすぎないものであれば、それは問題となるね。条件を満たした協力関係は、医療サービス、教育、農業、新しい技術や情報の移転などを促進し、経済発展と繁栄をもたらしてくれる。

Q 国連機関は、南北の加盟国間の公平な協力関係をどのようにすすめているのですか？

A 国際連合は、南北の国のあいだの国際協力の促進と実行を先導する世界母体だ。その関係機関やプログラムは、環境、健康、教育、国際援助、貿易、債務、人権や安全保障、女性の社会的地位の向上、そして平和構築などを守っていくというような非常に重要な問題について、各国が議論し、討論し、取り組み、そして決定をくだすための意志発表の機会を提供している。2000年のミレニアムサミットでは、世界の指導者たちが集まり、2015年までに極度の貧困を半減し、先進国と途上国との協力によって、すべての国のための発展を実現することを約束した。

Q 批評家たちは、国際化は貧しい国に対して不公平に進められていると言います。国際化の利益が世界中に平等に分配されることを、わたしたちはどうやって確かめられますか？

A 原則として、世界中の経済や社会の統合や相互依存の高まりは、開発や協力のよいサインと言える。しかし、貧しい国が単なる原料の調達源や可能な輸出先市場としてのみ見られているのであれば、それはまちがった協力関係であって、その不平等は高まり、これまでにないほどの環境悪化を引き起こすことになる。裕福な国は、その富と知識を貧しい国と分け合って、貧しい国によりよい機会を提供すべきなんだ。これは、貧しい国が貧困から抜け出すのを助け、われわれみんなが持続可能な成長と発展への道をたどるためのカギなんだよ。

環境や開発の問題について、UNEPの専門家に質問はありませんか？
cpiinfo@unep.org
までメールをください。
次号以降でお答えしていきます。

GREENHOUSE EFFECT

ほんとうの温室効果

ぼくたちは、ざっとあげてみても汚染、大量な種の絶滅、森林破壊のように人間が原因となっている地球上の問題を、たえずつきつけられている。ぼくの地元、イギリスのサマーセットにある公立中学校リスリントンスクールでは、何かしようと決意をし、絶滅の危機にある動植物を救うためインド北東部の現地の人たちといっしょに取り組んでいるのだ。

4年前に入学して以来、ぼくは熱心な温室クラブの一員だ。学校で植物を育てることは、一見ふつうに見えるかもしれないが、リスリントン校の温室にはとてもめずらしい植物がある。ランは、花を咲かせる植物の中でも品種がずば抜けて多く、2万5千種類以上あり、それとほぼ同等数の品種が今後発見される見込みだ。ランはすべての大陸で育つが、さすがに南極大陸では品種が限られる。

ぼくたちの学校は、伝統の町バス郊外にある商業学校で、物理のサイモン・ヒュー・ジョーンズ先生が担任になるまで、その使い古しの温室には、長いあいだふつうのトマトとサボテンしかなかった。それからの数年間、温室では花だん用植物や、つり花かごが増え続けた。そしてそれは温室の修理費用をおぎなうための安定した収入を生んだ。やがて、寄贈された数種のシンビジウムの花と交配を重ねたすえに、何種類かのランが登場した。

今、ぼくたちの学校では、エランギスからジゴスタテス、そしてアングレカムからジゴ

ペタラムまで、ありとあらゆるランがものすごい勢いで育っている。ぼくたちは長年、温室を植物で満たすよう苦勞してきたが、今では、ぼくたちが手あたりしだいに育てるので、すべての植物のためのスペースを見つけるのに苦勞している。

リスリントンスクールは、無菌環境で寒天培地ゼリーを利用するイギリスで2番目に大きなラン専門の繁殖研究室となった。ぼくたちは、めずらしい場所に研究室をかまえた。使われていない女子トイレだ。

ぼくたちの仕事は、今いちばんおもしろい段階に入ろうとしている。世界で唯一面積を広げつつある熱帯雨林のあるコスタリカや、ヒマラヤ山脈東部のインドのシッキム州のような、植物学的に重要な生育地との結びつきを築いているのだ。インドでの作業は、トゥムロンの町のそばにあるラブラング修道院の学校が中心となり、IUCN(国際自然保護連合)のインド亜大陸地域ラン専門家グループ長であるモハーン・ブレダン氏と連携をとっている。

トゥムロン周辺は、多くの絶滅危機にあるラン品種の自生地だ。それらのランは、人々が野生からの摘み取りを続けるために、高まる脅威にさらされている。そして、供給を増やすためにもっとたくさん育てていこうという地域プロジェクトもない。

ブレダン氏が近くのランから野生の種を集め、繁殖させるためにぼくたちの学校に送る

というのが計画である。そしてぼくたちはシッキムの村の学校に苗を送り、そこで生徒たちは苗を鉢に植えて育て、その後成長したランを地元で販売する。ぼくたちは、このプロジェクトによって、人々が野生からランを摘み取るのをやめ、地域ぐるみでランの保護運動にかかわってほしいと願っている。

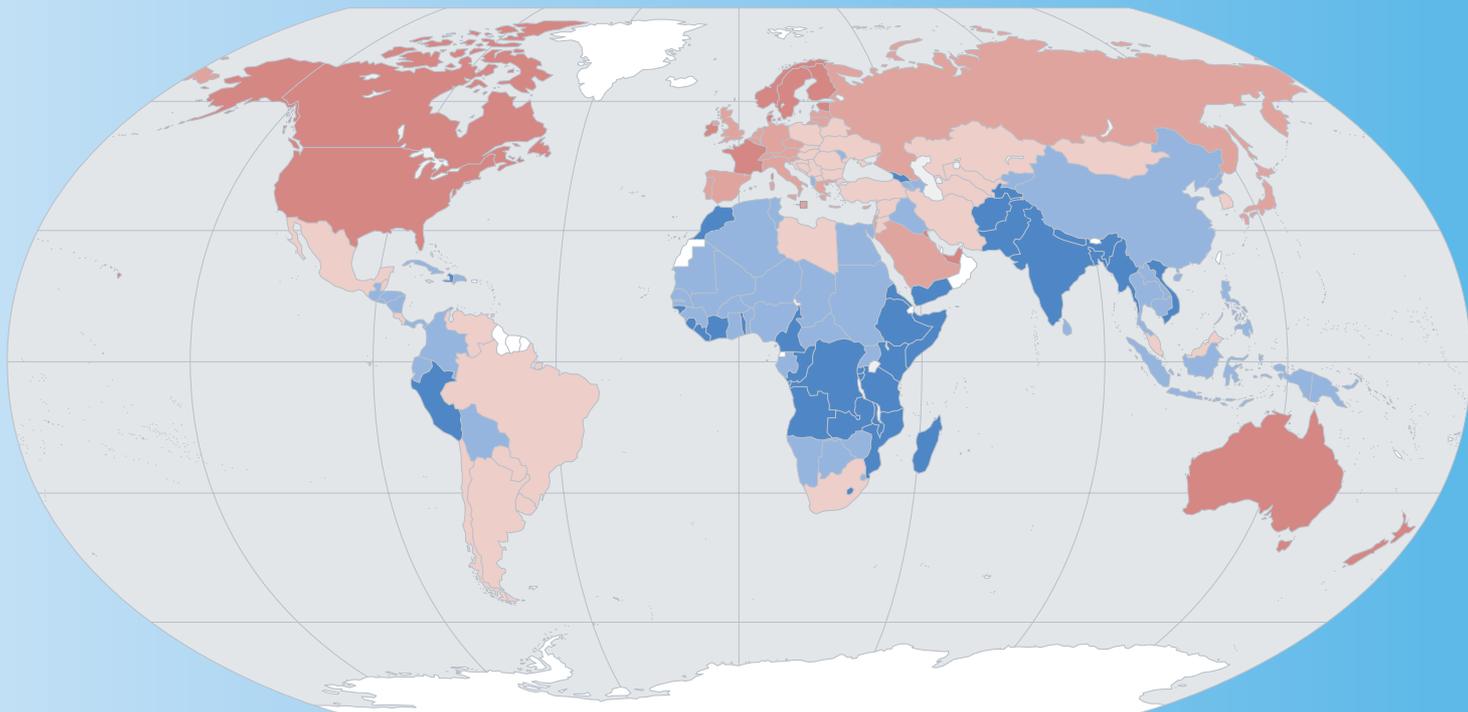
ランは、ロンドンのキューガーデンのような既成の園芸拠点や団体を通じて販売されるだろう。このような販売からの利益は、人々が苗を自分たちでつくれるようにするため、研究室の建設資金としてインドに送金されることになっている。

ぼくたちは、こういった方法がブラジル、グアテマラ、アフリカをふくむ世界のあちこちへと広がっていくことを望んでいる。ぼくたちの目標は、ランの世界での需要を満たすために、このような自給自足のラン繁殖研究所をたくさんつくること、そしてこれらの貴重な花を、この先ずっと保護していくことだ。

カラム・スウィフト(Callum Swift 15歳):
リスリントン商業学校10年生



いっしょに持続可能な開発を



地球は、たったひとつしかない。われわれは、しばしばそれと気づかぬうちに、われわれが利用するものやサービスを再生する地球の驚くべき生物学的な能力に頼っている。

たとえば、食べものや飲みもの、衣服や住居、どうやって寒さをしのいだり、動きまわったり、そしていつも健康でいられるか、などだ。

エコロジカルフットプリント(ecological footprint)は、地球の自然資源やエコ・サービスの利用を測定する指標のひとつだ。フットプリントとは、グローバルヘクタールで表記される表面積で、食べものや使用する繊維の生産を続け、ゴミを使い尽くし、消費するエネルギーを生成したり、道路や建物やわれわれが依存しているその他の生活のための基礎設備の供給に必要な面積である。現在、一人あたりのフットプリントの世界平均は、2.2グローバルヘクタールだ。ところが、地球が受け入れることができるのは、われわれ一人につきやっと1.8グローバルヘクタール。つまり、およそ地球の1.25倍の面積を、われわれは使っていることになる。

過大なフットプリント

上の地図は、われわれの現状を国ごとに示している。青い色の国は世界平均より少なめで、赤い色の国はそれ以上を利用していることをあらわす。今さら驚きはしないが、南にある貧しい国はたいてい、環境用語でいえば持続可能に暮らしているのに、北の国は、高い消費率によって超過大なフットプリントを示している。

平均以下で生活している国とそれ以上の国(2001年)

図の150カ国のうち69カ国の平均的な住民のエコロジカルフットプリントは、地球上で一人あたりが利用できる広さの18グローバルヘクタールを超えている。33カ国では、平均的な人たちが利用する広さはその2倍以上であり、13カ国では3倍以上である。

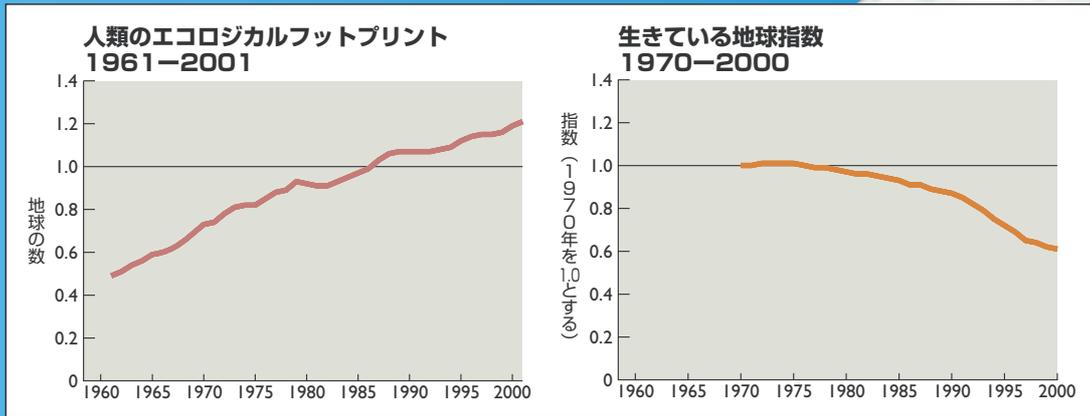
-  利用している一人あたりのバイオキャパシティ(生物学的生産が可能な土地面積)が世界平均の3倍以上の国
-  利用している一人あたりのバイオキャパシティが世界平均の2~3倍の国
-  利用している一人あたりのバイオキャパシティが世界平均と同じ~2倍の国
-  利用している一人あたりのバイオキャパシティが世界平均の1/2~同じの国
-  利用している一人あたりのバイオキャパシティが世界平均の1/2以下の国
-  データ不足

生活の質

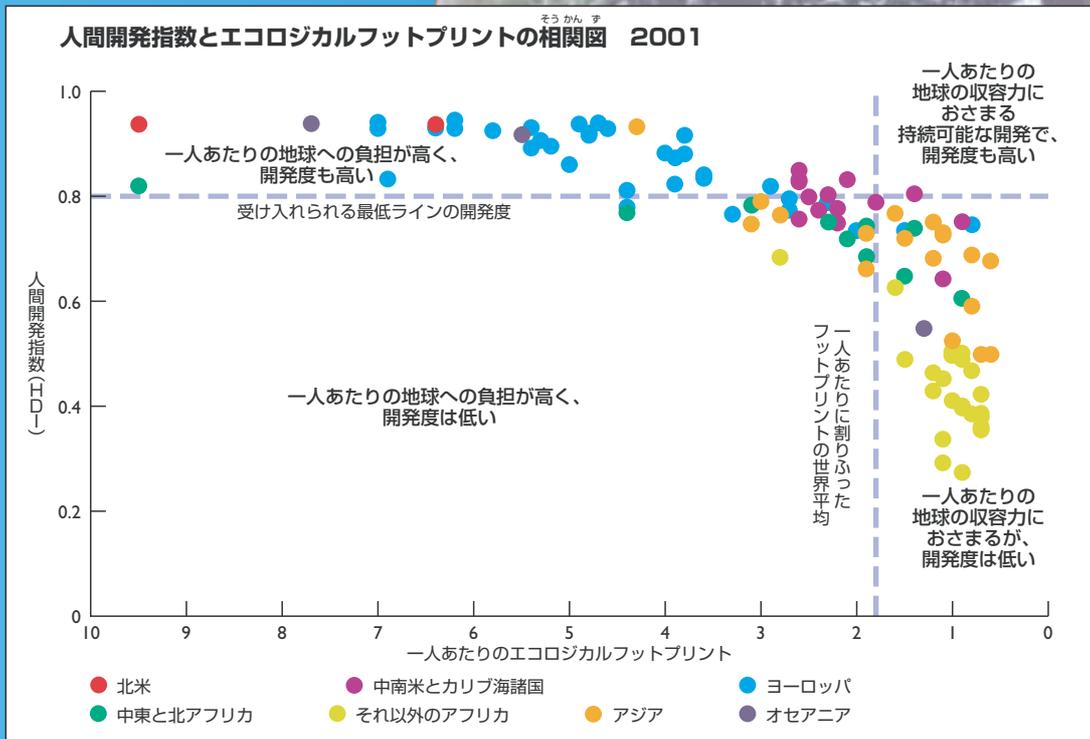
パキスタンの経済学者マブール・ハクは、「人々はまったく表面にあらわれない、あるいはすぐにはあらわれない成果を、よく所得や成長率のかたちで評価しようとする。知識への多大なアクセス度、よりよい栄養や医療サービス、より安全な暮らし、犯罪や暴力に対する安全確保、満足できる余暇の時間、政治的そして文化的自由、地域活動に参加しようという感覚などがそうである。開発の目的は、人々が健康的で創造的な長い人生を楽しむことを可能にする環境を築くことだ」と信じている。そうした考えの人がつくった「国連人間開発指数」は、こういった生活の

Developing sustainably...together

We've only ONE planet



「人間のフットプリント」は、地球の再生可能な生物資源の利用状況を示しているが、現在1961年の2.5倍となっている。われわれみんなで地球1.25個分にあたる資源を消費しており、その率は今も増え続けている。「生きている地球指数」は、土地、淡水、海洋種の現存している数量の平均的な傾向を示す。これは1970年以来、40%ほど下降した。これらの要因は関連しているのだろうか？



側面を数値化して表現する。毎年出される指数は、北の国々のより高い生活の質を示すが、果たしてその生活は持続可能なのだろうか？

持続可能な生活

オーレリアン・ブータールは、人間開発指数をエコロジカルフットプリントと組み合わせ、2つの指標をそれぞれ座標軸としたグラフ上に描いた。彼の図式によれば、より高い生活の質を求めると、われわれは環境にやさしい持続可能な生活から離れていく。環境にやさしく持続可能な、しかも質の高い生活という魅力的な融合を、やりとげた国はまだない。今、われわれみんなに与えられた挑戦として残されている。

地球上で、よりよく生活しよう：

われわれの挑戦は、すべての国が“持続可能な開発”を実現すること、それも高度な開発を保ちつつ、地球ひとつ分の資源の範囲内で生活することだ。どの国もまだこの状況には達していないが、いくつかの国はそれに近づいている。

われわれの、たったひとつの地球

熱意あふれるホームズ

Holmes' fire



イギリスの 金メダリスト、 “Dame” ケリー・ ホームズに聞く

2004年アテネオリンピックの陸上800メートルと1500メートルで優勝したケリー・ホームズは、2つの金メダルを獲得した史上3番目の女性だ。以前は軍曹として陸軍で働いていた35歳のケリーは、ケガに悩まされ続けた運の悪い時期を乗り越え、2個目の金メダルを得た瞬間、勝利の喜びで腕を天高く突きあげ笑顔を見せた。

この瞬間をとらえた写真が、最近行なわれた世論調査で、イギリス国民がもっとも好む一枚に選ばれた。ニール・アームストロングの月面着陸の瞬間も、チャールズ皇太子とダイアナ妃の結婚式でのキスシーンも、ビートルズのメンバーがアビー・ロードの交差点を渡っている有名な写真でさえも、この勝利の一枚にはかなわなかった。

“デーム(Dame)”というイギリスのナイト爵位に相当する、女性への栄誉ある位を与えられたケリー・ホームズは、イギリスでボランティアや慈善事業活動をする有名人の中で、もっとも影響力を持つ人物にも選ばれた。現在は、スポータビリティ(Sportability)という障害者のためのスポーツ慈善事業や、ロンドン大学病院(UCLH)で子どものガン治療にあたる2つの専門医グループと、乳ガンのための

慈善事業をしている。また「ケリーと行くキャンプ」というプログラムを通じて、イギリスで将来性が期待される12人のスポーツ選手の卵を指導したり、南アフリカの黒人居住区でスポーツや健康増進のための活動にもかかわっている。ケリーはここで、仲間であるモザンビークの陸上選手マリア・ムトラと、2年間にわたってトレーニングを重ねたのだ。

ケリーは、2000年シドニーオリンピックの女子800メートルで、モザンビーク初の金メダリストとなったムトラから、大きな影響を受けたと語る。スラム街で生まれ育ったこの若い選手は、大きなハンディキャップを乗り越えて国民の手本となった。そして、将来有望なスポーツ選手たちに奨学金や運動用具、指導方法を提供するマリア・ムトラ基金を設立したのである。

T (ツンザ):オリンピック競技を通じて国際的な精神を育成するために、さまざまな試みがなされてきました。先進国と途上国のあいだに見られる協力や友情は、政府間の交流に影響を与えていると思いますか？

K (ケリー):わたしは、スポーツには国境などなく、先進国と途上国とを結びつける最高の手段だと信じています。オリンピックの精神には境界線などありません。人種や肌の色、宗教、社会的背景は問われません。スポーツには人々を団結させ、ものごとをやりとげる力や決断力、情熱を与える力があるのですから、世界に平和の橋をかけるための足がかりになると思います。

Paid in smiles 笑顔のごほうび

By ファン・オルティス



Juan Ortiz

ペルー出身の人が、生まれ育った国ではなく、イギリスでボランティアの仕事を選ぶのはどうしてだろう？ それは、南と北の国々がおたがいに助け合い、国際的な協力をすすめるように、そして他国での経験を祖国に持ち帰るためにだ。

ぼくは若い頃からずっと、仕事と勉強のための時間を調節しながら、ボランティアをしてきた。ペルーとオランダの若者を対象にした文化交流プログラムで初めての外国滞在から帰ってきたぼくは、「アショカペルー(Ashoka Peru)」という団体から、スポーツや若者へのリーダーシップ、環境問題と啓発、そして性病の感染防

止などをふくむ教育プロジェクトを通じて、恵まれない若者が力をつけるように手伝ってほしいという依頼を受けた。

このプログラムを通じて、ぼくは自分の国がかかえている問題を理解することができ、問題解決の手助けをしようという決意を新たにしました。ボランティア活動のあり方や、情熱を持ったリーダーが社会を変えられるということがわかったし、ボランティアをずっと続けていこうとも決めた。それから、ボランティアに参加する人がいちばん望んでいるのは、心からの笑顔と感謝の気持ちだということもわかったんだ。

リマで国際関係の研究を終えたのち、ぼくはイギリスのNGO(=非政府組織)「ピース・チャイルド・インターナショナル」から、ラテンアメリカとアジアで、若者たちがリーダーシップを取ってかかわっているいくつかのプロジェクトをコ

T: オリンピックのような国際的なスポーツイベントは、トレーニングをする機会がなかなか得られない選手よりも、時間やコーチや施設面で恵まれ、経済的に豊かな国の選手のほうが有利であると抗議する人たちがいますが、それについてはどう思いますか？

K: わたしは、オリンピックが特定の国にだけ有利なものとは思っていません。確かに、自分の持っている力を伸ばす機会に恵まれた選手もいますが、能力があって成功したいという意

志を持つ人ならば、だれにでももっとチャンスはあります。ただ開発途上にある国では、だれもが自分の目標を達成する公平なチャンスを持つように、きびしい資格選考規定を定めていない場合がしばしばあります。

T: 自分の国で、若い選手や若者全般が南北間の協力関係を促進することができるということについては、どう思いますか？



K: 現代の若者にとって何よりも大切なことは、昔の時代に人々がおそらくいただいていたであろう偏見にとらわれることなく、世界のあちこちでの出来事をじゅうぶん^{じゅうぶん}に知った上で、南北関係について自分自身で決断し、判断することです。スポーツ好きの若者にとって、一堂^{いちどう}に会して競いあう^{かい}ということは、何よりも長続きする強い友情をはぐくむための理想的な機会なのです。

John Gilles/PA/Empics

ーディネートするボランティアの仕事をしなかと誘われた。ぼくは、自国で若者たちといっしょに経験したこと——貧困にあえぐ学校や、山積みの問題にもかかわらず、よりよい生活をめざして必死でがんばっていること——を、イギリスの若い世代に向けて話した。時がたてば、多くの人々が国際協力の精神を受け入れて、ボランティア活動に関心を寄せ始めるだろう。

いまバレーに戻ってきて、ぼくはまだやるべきことはたくさんあると考えている。まずは急いでNGOを立ち上げようという目標を立てた。これでボランティア活動を促進し、若者によるプロジェクトを継続することができるように、いつもボランティアとしてやっていく。現在、ぼくはWWF(=世界自然保護基金)という団体で働いている。自然保護の分野でリーダーとなれそうな人々を探し出して、彼らの活動を支援

するものだが、いっぽう、時間をやりくりして他の組織でもボランティアとして活動している。きみが起こす行動が大きかろうが小さかろうが、きみが最良の意志を持って行なう限りは、その規模は関係ないんだ。ボランティア活動をして失うものは何もないが、そこから得るものはたくさんある。見返りを期待せずに何かをするのって、世界で最高の気分だよ。

Topfoto



Topfoto





*A view from
the North*
北から見ると

国連がかかげるミレニアム開発目標(MDGs)を達成するために、人類が立ち上がって、すべての人々が人間らしく暮らせるようにと願うなら、南北間の協力は不可欠だ。けれどその協力とは、かつて何十年ものあいだ繰り返されてきたようなものであってはならない。開発途上国の人々を真のパートナーと見なして、彼らにみずからの責任と、彼ら自身の開発の所有権を与えるべきだ。

援助国の多くは、すでにこうしたアプローチをとっており、自国の優先順位よりも、援助を受ける国の開発戦略に沿うように、援助プログラムを調整している。統治がうまくいっている被援助国は、ますますその援助を一般予算として受け取ることができ、自国で適切と考えるところに予算の振り分けができるようになってきている。いっぽうで、まだ民主制のシステムがととのっていない国や、人権擁護に違反する過去を持つ国の場合は、外的援助で民間に直接働きかけ、変革を後押ししながら不正を最小にとどめることが、しばしば最善の方法となる。どちらにしても、南北間の開発協力を効果的に進めるには、援助側からの調整と協力体制が必要であり、それによって利害の対立を防ぎ、被援助国にかかる管理負担を軽減することができる。これはすでにヨーロッパ連合(EU)の各国で行なわれている。

平等な南北間の協力関係を築くためには、貿易がとても重要だ。開発途上国を本格的に世界規模の市場に参加させることができれば、その国の経済が強化され、ミレニアム開発目標推進への助けにもなる。世界の貿易規則や規制を決めている先進国は、公正な取り引きの環境をととのえるべきであり、とくにヨーロッパの自国農業保護制度は改正する必要がある。

南北間の協力を助長するには、若い世代が重要な役割を果たすことができる。ぼくたち若者は、経済的な利害とは関係なく、共通の目標にむかって力を合わせることができるからだ。そうすることで南北間の協力における過去の困難を乗り越え、よりバランスのとれた持続可能な世界を実現するための努力が期待できる。

ラーズ・ローゼンダール・アペルクイスト(Lars Rosendahl Appelquist):デンマークのTUNZA 青年アドバイザー

わたしたち若い世代が、結局のところ環境に対しての責任をになうことになる。この世界が直面している問題に取り組むのは、わたしたちの任務なのだ。近年、多くの開発途上国で急速な工業化が進み、経済的繁栄をとげているが、かつてないほどの環境問題をも引き起こしてきた。経済発展と環境保護のバランスをとることは、わたしたちにとっては難しい挑戦だ。先進国と途上国のあいだの理解を深め、文化交流を増す必要がある。

地球市民として、また未来のリーダーとして、わたしたちは南北が協力して資源の共有ができるよう推進する必要がある。開発途上国では、デジタルディバイド(digital divide)と呼ばれる情報格差があり、情報や環境にやさしい技術の不足で、多くの環境問題が起きている。GDP(=国内総生産)成長率のような、政府とその政策の成功度や実効性を評価するために使われる経済指標とともに、生物多様性、自然資源の獲得

争い、石炭や原油などの“やっかいな”エネルギー源から排出される有害ガスへの脅威も考慮しなければならない。

持続可能な開発にかかわる方法は、たくさんある。ユース交換プログラム(Youth Exchange Programme)のようなプロジェクトに参加するのもそのひとつで、そこでは北からも南からも社会的な若者たちが集まってネットワークをつくり、

社会的な意識向上や共同作業を進めている。そこで、環境に関する情報を効率的に共有するためのオンライン・データベースを構築している。また非政府組織(NGO)の情報資源を活用することで、さまざまな教育プログラムやその他の新しい構想を企画でき、それらを通じて、環境に対する意識の啓発や、持続可能な消費および成長といった問題を提議し、ボランティア活動や情報の共有の意義を話し合うことができる。

わたしたち若い世代は、環境に対する現在の取り組みの結果を背負うことになるだろう。だからこそ、おたがいに手を取り、協力と努力を重ねることで少しでも良い結果をもたらし、持続可能な将来に向かう道を見いだすことができるのだ。

スーシュイアン・リ(Sixuan Li):中国のTUNZA 青年アドバイザー

**North-South
cooperation...**
南北が協力すれば...
TUNZA
青年アドバイザーの考え



*A view from
the South*
南から見ると

Trading futures 未来の貿易



バンド「コールドプレイ」のクリス・マーティンは、みずからを“三流のボノ”と呼ぶ。有名人から活動家に転身した彼は、U2のリードボーカルのボノの足跡をたどっており、音楽活動をしていない時には公正な貿易に債務免除、そして開発援助の増資をめざしてキャンペーンを展開しているのだ。マーティンが特に力を入れているのは、その知名度を生かしてフェアトレード(fair trade)を広めることだ。フェアトレードとは、開発途上国の貧しい人々がつくった製品を、正当な収益が得られるように販売することである。この問題でガーナとハイチの小さな農家を訪ねてから、彼は当然のことに「今後インタビューでは、自分の靴下の色について話すくらいなら、その前にこの話題にふれることにする」と言っている。

フェアトレード運動では、わかりやすく実質的な方法で、消費者が道徳的に正しい貿易を、自分の財布と相談しながら支援できる。もともと消費者の声から始まったこの活動は、道理に合った賃金設定と労働条件のもとで生産された質の良い製品を軸にして、主要市場占有率を高めるとともに、人気を博しつつある。フェアトレードの紅茶やコーヒー、チョコレートやその他の食品が、今では世界各国の大規模チェーンのスーパーや専門店に並べられている。公正な価格で取り引きされた衣類、宝石、贈答品、芸術作品、家具なども、フェアトレード製品を取りあつかう会社や非営利組

織から、あるいはオンラインで生産者自身から直接、購入することができる。音楽愛好家なら、フェアトレードのマスメディアをあつかう会社から、CDやコンサートのDVDだって買える。収益の少なくとも半分が、収録を行なった開発途上国出身のアーティストたちの手に渡ることを保証している。

市場相場より上の支払いをすることで、この運動は南部の生産者を不安定な市場価格から守り、原価をまかなって家族をやしなない、利益をコミュニティに再投資することができる。フェアトレード製品を買い付けるグループの多くは、生産者とその家族に職業訓練を提供したり、地方の開発プロジェクトのために出資したりしている。フェアトレードは、個々の生産者や職人に経済的な基盤を与えるいっぽう、高まりつつある公正な貿易を推進する運動によって、世界経済を支配している規則や慣行を改革するという目的も持っている。こういったグローバリゼーション(=地球規模化)は、経済の一体化をうながしている。世界貿易機関(WTO)の記録によれば、昨年の世界の貿易量は9%も増加し、その額は9兆ドル(=約1,035兆円)にも達している。

貿易の障壁

国が企業に自由競争を許可できる場合は、みんなが国際取引によって利益を得ることができる。しかし経済的に豊かな国は、自国の産業を競争から守ろうと助成金を出したり、輸入を制限したり、輸入品に関税を課したりすることがよくある。北の市場に輸出しようとする貧しい国々は、豊かな国同士が通常の貿易をする場合に比べて、平均すると約4倍もの貿易面での障壁に直面する。この障壁は、輸出する品物が加工されていけばますます大きくなる。貧しい国が利益を得ることのできる付加価値を持った商品よりも、製品の原料を輸出するように制限をかけているのである。

消費者の声から始まったフェアトレード運動は、主要市場でのシェアを高めるとともに、人気を博している。

低所得国の人口は、世界人口の40%以上にもものぼるといのに、その国際貿易に占める割合は、たった3%だ。それに対して、世界人口の10%にあたる7か国(アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアと日本)が、合計すると全世界の輸出の半分を占めているのだ。

オックスファム(Oxfam=世界100か国以上で活動する国際協力団体)の「メイク・トレード・フェア」キャンペーンによると、アフリカ、東アジア、南アジアとラテンアメリカが、世界貿易の輸出占有率をそれぞれ1%ずつ増やすことができれば、1億2,800万人もの人々が貧困から抜け出すことができるという。アフリカだけでも、輸出占有率が1%増えれば、この大陸が受けている援助額の5倍にあたる700億ドル(=8兆円)という金額を生み出すのだ。

人々によるプレッシャー

現在、変化をめざす機運は、かつてないほどの高まりをみせている。なぜなら、世界中の人々が先進国と途上国の政府や企業、消費者に対してプレッシャーをかけているからだ。ロックスターや政治家、実業家、草の根運動家から学生までが、みな力を合わせて貧困とたたかっている。事態を改善できると信じて、NGOにボランティアとして参加したり、国家の元首に働きかけたり、集会や資金集めのチャリティーを開催したり、あるいはシンプルに家族や友人との話題にしたりしているのだ。とてつもなく大きな課題ではあるけれど、人々は、今こそ公平で義になかった貿易を通じて、世界の貧困と正面から取り組むべき時だということに気づいたのである。



天空にかかるネットワーク

Calling for change 変化を求めて鳴らす電話

ウガンダのナムンシの村民が電話を使う時には、近所に住むファティマ・セルウォニのところに行く。この地域で携帯電話を持っているのは、彼女たった一人なのだ。いちばん近い公衆電話は4キロ以上離れているから、彼女に支払う料金は、そう高いものではない。

ファティマは、バングラデシュやルワンダ、ウガンダに数百人はいる村の自営の電話交換手の一人で、繁盛する小さな事業のために、北で発達した通信技術を利用している。大半は女性で、グラミン技術センターの支援を受けて少額のローンを組み、それを使って携帯電話や接続ケーブルを購入し、料金を前払いする。そしてわずかな利幅を上乗せして、各自の顧客に仕事用や個人的な通話を提供するのだ。読み書きのできる交換手は、時としてメールの送信サービスもうけよう。

人々のつき合い方や仕事のやり方さえ変えてしまう携帯電話は、開発途上国で急速に広まってきている。これは産業革命の時代に、北の国々で電報や鉄道が導入されたのと同じ状況だ。携帯電話は、道路、郵便システム、固定電話網のような他の連絡手段がとぼしい地域で、“馬とび”のように抜きん出た技術として、開発に大きな影響を持つにいたっている。

ある調査によれば、100人の国民につき携帯電話が10台増えると、その国は0.6%の経済成長をとげることができるという。携帯電話を使うと、取り引きにかかる費用やリスクを減らし、旅にかかる時間と旅費を節約することができる。農業や漁業をする者は、あちこちの市場に電話をかけ、どの市場で自分の品物を高く売ってくれるのか問い合わせできるし、経営者は必要な品の注文や確実な支払いをメールですることでもできる。人々は健康相談のために病院に電話をかけることも、獣医の判断をあおぐことも可能だ。また、仕事のやとい主と職をさがしている者とが、電話で面接を行なうことだって可能なのだ。

携帯電話のネットワークは、固定の電話線を取り付ける場合に比べて費用が安く、設置するのが簡単であり、また維持管理もそれほど必要としない。無線信号は、固定電話ではさまたげとなる山脈や広大な砂漠など、地理上の障害物もうまく回避することができる。また携帯電話の基盤は、洪水、台風、地震やその他の自然災害に強い。



アフリカは、携帯電話が世界でもっとも早く普及した市場であり、南のほとんどの地域も同じ道をたどっている。多くの人々が1台の携帯電話を共有するので、販売数量から推定するよりも利用者の範囲はずっと広がる。電話を使う時には、読み書きの能力も、場所も、教育や安定収入があるかどうかなどもいっさい関係ないので、不利な境遇にある人々や遠隔地に住む人々も、この経済活動に参加することができる

Jorgen Schytte / Still Pictures



www.firstmilesolutions.com

のだ。電気がない生活をしていても、ファティマのように車のバッテリーを使って充電することができるし、風力や太陽電池の充電器だって利用できる。

ファティマが村で電話のサービスを始めてからというもの、彼女の毎週の収入は2倍になり、近くの住民は世界の情報の流れにアクセスしたり、それに貢献したりすることが可能になった。

On to the Information Highway 情報ハイウェイに乗って

カンボジアの北東にあるラタナキリ地域は、地球上でもっともへんぴな場所のひとつに数えられる。いちばん近い州都であるバンルンまでは、車で2日間、荒れたでこぼこ道を行くしかない。ここには水道も電気も電話線も、テレビや新聞もない。しかし新しい技術改革のおかげで、ここに暮らす人々は定期的に電子メールをやりとりしている。

毎朝、バンルンのおそれを知らない5人の“バイク野郎”が、小さな無線端末機を使って中央衛星装置から電子メールを受信し、オートバイで広範囲におよぶ13の村をたずねてまわる。その多くは、通常の交通手段やデジタル信号の届かない場所だ。それぞれの村では、寄贈された太陽電池を使った無線カードつきコンピュータでメッセージを受け、送信する電子メールを彼らに渡す。送信メールはそれぞれ集められて、バイクでバンルンに運ばれ、衛星経由でその日のうちにインターネットに送られる。

このプロジェクトは、アメリカン・アシスタンス・フォー・カンボジア (American Assistance for Cambodia=アメリカのカンボジアへの支援団体)とジャパン・リリーフ・フォー・カンボジア (Japan Relief for Cambodia=日本のカンボジアへの援助団体)が立ち上げたもので、資金はアメリカと日本の個人からの寄付、それに世界銀行・アジア開発銀行からの出資に頼っている。プロジェクトを技術面で支えるのは、アメリカのファースト・マイル・ソリューションズ (First Mile

Netting the ether

Solutions)という商社である。このシステムがあれば、村人はオンラインニュースから世界情勢を知ることができるし、学校で使う教材を供給する海外の寄付提供者に子どもたちが手紙を出す手助けもできる。また、教師たちが管轄の教育省に報告書を送ったり返事を受け取ったり、市民がその関心事や不満を政府代表に伝える手立てにもなるし、職人たちは手工芸品を世界市場に売り出すこともできる。このプロジェクトを通じて、村の保健所職員は遠隔医療プログラムを使い、バンルンの州立病院やプノンペンのシアヌーク病院ホープ医療センター、マサチューセッツ総合病院、ハーバード大学医学部に患者の患部の画像を送信し、診断について意見を聞いたり、また治療のアドバイスなども受けている。

同様な南北の協力が開発途上国の貧しい人々に情報通信技術(ICTs=Information and Communication Technologies)の恩恵をもたらしている例はまだある。農業をやっている者は、仲介業者と穀物の価格を交渉する前に、国際商品市場での作物の相場をオンラインでチェックすることができる。漁業をやっている者は、波の状況や魚たちの動きをチェックすることで、危険な天候を避け、大漁のチャンスをつかむことができる。パソコンを使えない人でも、使える人からの適切な情報を拡声器で聞くことができる。

MSスワミネイサン研究財団(MSSRF=MS Swaminathan Research Foundation)は、2007年までに地元のスタッフが勤めるコミュニティ遠隔通信機器をそなえた情報知識センター(KCs=knowledge centres)を、インドの60万人以上の人々が暮らす村すべてにつくる計画を立てている。政府、市民社会、大学、メディア、そしてインドのヒューレット・パッカード研究所(Hewlett-Packard Labs)、ユニセフ(=国連児童基金)、カナダ国際開発庁、フレンズ・オブ・MSSRF東京支部など、ちょっとあげただけでも多数の民間企業、海外の寄付提供者からなる、100人を超えるメンバーとの提携で“学習革命”を起こし、貧しい人々のために情報技術の民主化をはかろうとしている。



Jorgen Schytte/Still Pictures

Father of invention 発明の父



web.media.mit.edu/neilg/neil

必要が発明の母ならば、発明の父は実現能力に違いない。

開発途上国の発明家は、アイデアをたくさん持っているにもかかわらず、適切な手段がないので、それは紙に描いたスケッチ(=絵に描いた餅)にすぎない。

そこで、マサチューセッツ工科大学のニール・ガーシェンフェルド博士とバクティア・ミクハク氏は、こうした発明の道具

具を普通の人たちの手に渡す目的で、個人的な製作実験室を考えた。それぞれ2万ドル(=約230万円)をかけた製作実験室には、切ったり、つなげたり、計算したりするための道具が一式そろっているので、この道具を使って物体をマイクロンの大きさや毛髪の100万分の1の細さに加工することが可能だ。

この考えにもとづいた製作実験室は世界中に設置され、さまざまなアイデアを形にしている。インドの牛乳にふくまれる脂肪分を計測するセンサー、ガーナのキャッサバ(=タピオカの原料)用粉碎機や農具、それにノルウェーで動物の群れを追跡するためにつくられた電波発信装置付き首輪と無線ネットワークなどが、例としてあげられる。

ガーシェンフェルド氏がめざしているのは、こうした製作実験室を、個人が持続して操作ができるようにして、地元の経済を活性化させ、地域のニーズに合ったさらなる技術革新を可能にすることだ。博士は、開発途上国にとってはこの製作実験室は“生き残りをかけた手段”になると語る。“各地域に適した問題の解決策”を考案し、地元で具体化して、それを地球規模で共有するのだ。



www.web.media.mit.edu/neilg/neil



www.firstmilesolutions.com

SEEDS OF CHANGE 変化のタネ



TV Vandenbosch

収益をあげ、貧困を減らし、環境を改善する。この3つすべてを同時に行なうなんて、できすぎた話と思うかもしれない。でも、これが持続可能な開発のすべてだ。最近はこの開発を実現するのに役立ついろいろなすぐれたアイデアを持った、小規模な企業家が増えてきている。

な課題に対処するため、国連が世界の企業に参加を呼びかけた取り組み)、スイス・リー社(=スイス再保険会社)の支援を受けて、受賞したプロジェクトに対して、その内容に応じた援助をするが、それには社員教育や現地調査、融資支援、地域の横のつながりや、国際的な舞台に立つことなどもふくまれる。

本年度最終選考に残った2つのプロジェクトと2つの受賞者は、以下の通りである。

SEED CAPITAL

タネを資本に

世界の店頭に並んでいる石けんや、マーガリンのようなパンにぬるものの多くは、もとをたどればアフリカの熱帯雨林にはえるパイナップルくらいの大きさの果物「アラブラッキア」の木の实から取れる油だが、その木の本当の価値を知らない地元の住民は多い。

現在、ナイジェリアとオランダの組織間の協力によって、それら共同体でこの実を収穫し、新しい苗木を植えるようすすめている。オ

ランダのユニリーバ社とオックスファム、地元グループの「フレンズ・オブ・アース・ナイジェリア」、ナイジェリア森林研究所、ナイジェリア自然保護基金が参加するこのプロジェクトは、持続可能な収益および森林破壊の防止をめざすものである。村の世話役はこの実の収穫を管理し、実からオイルを抽出するために、地元の庄搾工場に運ぶ時の監督役もつとめる。そしてユニリーバ社は長期間の需要と公正な価格を保障して、オイルを買い付けるのだ。



Dr. Tony Simmons | ICRAF

S EEDという新しく設けられた賞は、南北の協力を支持し、社会や経済の発展および環境のための革新的な地域プロジェクトを奨励する。SEEDとは、環境と開発を支援する事業(Supporting Entrepreneurs for Environment and Development)の略語で、現代と伝統的な技術を調和させ、人材、財源および天然資源の共有を強調した解決方法をとくにサポートする。

IUCN(国際自然保護連合)、UNEP(国連環境計画)、UNDP(国連開発計画)が考案したSEEDは、各国政府(ドイツ・アメリカ・ノルウェー・イギリス・オランダ)や、国連グローバル・コンパクト(=地球規模化によるさまざま

Cultivating health 健康を大切に守ること

アフリカの農民たちは、中国に古くから伝わる薬草を、金になる特産物として自分のレパートリーに加えてつある。ケニア、タンザニア、ウガンダをまたいで、Artemisia annua(=黄花蒿・和名クソニンジン)と呼ばれる植物を栽培している業者がいる。これは、新しく非常によく効く抗マラリア薬の主要な原材料である。さもなくば、彼らは今でも紅茶やコーヒー、小麦や豆を栽培していたことだろう。

ベトナム戦争のあいだ、中国の科学者たちは政府の援助を受けて薬草から抗マラリア薬を開発し、ベトナム軍に供給していた。今や国際医療当局は、アルテミシニンをベースにした併用療法(ACTs)が、マラリアとたたかう上でとても重要だと考えている。アフリカだけでも毎年80万人を超える人が、マラリアで命を落としているのだ。

イースト・アフリカ・ボタニカルズというグループは、黄花蒿のさらなる栽培と加工をめざして、スイスの製薬会社と密接な提携を結び、この薬草の医薬品としての価値を国際舞台で立証しようと、ほとんど需要もなく資金もとほしい中で、8年という歳月をかけて栽培した努力がむくわれた。

この東アフリカの農業グループと製薬会社ノバルティスの結びつきによって、黄花蒿の安定した、そして以前の想像をはるかに超えた大規模な市場が保証された。2005年だけでも、その生産は200から1,500ヘクタールにまで増加したのだ。また、この提携には、薬草を東アフリカで育成するだけで

なく、ケニア国内でのエキスの抽出、精製施設の建設および技能開発のための技術的・財政的支援もふくまれている。

東アフリカでどんどんその数を増している農民たちにとって、このアーテミシアは、相場が不安定だったり下落しがちだったこれまでの金めあての作物とくらべて、有望な新しい定期収入源になると同時に、マラリアとのたたかひの手助けともなる。この小さなクリスマスツリーにも似た中国原産の植物が、南北間の協力を得て、世界中の2.1~3億人ともいわれる人々——とくに毎年新たにマラリアに感染する子どもたちに、すばらしいプレゼントを、つまり生きるチャンスを与えることになるのだ。



East African Botanicals



MANAGING MANGOES

マンゴーとうまくつきあうには

水分が多くおいしいマンゴーは、他のどのトロピカルフルーツよりプロビタミンAを多くふくんでいる。でも、もちろんマンゴーが食べごろになる期間は毎年とても短い。腐りやすいフルーツの多くは、食用となる前に捨てられてしまうのが現状だ。

そこで、ビタミンAとマンゴーから名前をとった「ビタンゴ(VitAngo)」という新しい事業では、この短命で余ってしまうマンゴーを、長持ちする栄養源と収入源に変える試みが、ケニアの一部地域でなされている。この地域では、ビタミンA不足に関連して、とくに女性と子どもが失明や身体障害に悩まされてきた。国際アグロフォレストリー研究センター(agroforestry=農牧混合林業)、レイク・ビクトリアスクールズ・アグロフォレストリー環境教育ネットワーク、ケニア環境教育機関とケニア・ユース・コミュニティ開発計画が協力して、実が熟す前後のマンゴーの収穫をチームで推進し、地元の住民が太陽光でマンゴーを乾燥させてドライフルーツにしたり、そのドライマンゴーを販売するための小さな会社をおこす手助けもしたりする。



NICE RICE

おいしいお米

米は世界の半数の人々の食料となっているのに、それを育てる人々は、しばしばその労力にくらべると、わずかな見返りしか手にしない。作物の値段は安いのに、最新の殺虫剤や化学肥料の支払いは増えるいっぽうで、しかもこういったものは健康にも、また環境にも害をおよぼす。しかし新しい集約栽培システムを導入すれば、そうした農家のためにも彼らが耕した土壌のためにもなるのだ。

コーネル国際食糧農業開発研究所、カンボジア農業開発研究センター、コーロ・ハレナス国立連合会、オックスファム海外コミュニティ・エイドなど、北と南各国の組織が、カンボジア、マダガスカルとスリランカの小規模農場主に対してこの新システム普及をめざしている。

苗を一定の広い間隔でマス目状に植えた上で、水やり・排水・雑草取り・たい肥やりなどの手入れが定期的なほどこされる。このような資源を有効に使う方法によって、収穫量は50%から100%の範囲で増加し、高値で取り引きできる良質な米をたくさん刈り入れることができ、また同時に節水と土壌改善も行なわれる。



BERRY GOOD

“ベリー”グッド

ヒマラヤ山脈のいたるところにはえているシーバックソーン(=沙棘)は、ちょっと不思議な木だ。その小果実(berry)からとれるジュースは栄養満点だし、オイルは化粧品や昔ながらの薬に使われている。葉っぱにも薬効があって、家畜の飼料にもなる。そしてたぶんもっと重要なのは、この植物の大きくて複雑な根がこの組織で、くずれやすい山の斜面にしっかりと広く根を張って土をとどめ、雨季におこる浸食を30%まで食い止めることができるのだ。

国際ヒマラヤアジア基金チベット共同組合、ネパールのトリバン大学、ドイツの応用科学大学が提携して、山岳地のコミュニティにこの植物を植えるようにすすめている。3ヵ所の種苗場が2003年に稼働しており、そのほかにも増えつつある。ネパールで唯一の形成外科専門病院では、すでにこのプロジェクトで育てた実のオイルを使っている。このプロジェクトでは、ほかにも、この植物を使ったジュースやお茶、医薬品や化粧品などの製品を海外に輸出する計画も立てている。

7つの不思議

7つの不思議

1. The elephant pump 象のポンプ

ジンバブエの分校で3人の子どもが亡くなった時、3人の若い先生——1人はイギリス人、残りの2人はジンバブエ人——が飲料水の汚染問題を解決しようと立ち上がった。この先生たちは、大昔の中国の技術をベースにした「象のポンプ」をデザインした。これは1本のロープと再利用した数枚のプラスチックディスクを使うもので、援助努力により設置された精巧なポンプの10分の1以下しか費用がかからない。これを使えば、1人につき1ドル以下ですべての子どもに一生分のきれいな水を与えることができるのだ。開発途上国が、故障した従来のポンプをごみとして放置している中で、これまで設置された象のポンプのほとんどが、まだきちんと動いている。今ではジンバブエだけでも1,200以上のポンプが使われていて、名誉あるセントアンドリュース環境賞の受賞者あての小切手のおかげで、アフリカ全土に広まりつつある。

photos: Pump Aid



2. E-commerce 電子商取引

電子商取引ができるサイトにログオンすれば、きみにも、世界でもっとも奥地に暮らす原住民がささやかな収入を得る手助けができる。タイのカレン丘族がつくる銀のアクセサリーや、ケニアのキスコ女性グループの織り手がつくったバスケットや、オーストラリアの先住民のアーティスト、リン・ジョーダンによる現代的なその土地固有のデザインなど、楽しみながらインターネットを閲覧できる。通常は、「ピープル・ツリー」「バーチャル・スーク」「グローバル・エクスチェンジ」「テンサウザンド・ビレッジズ」のような北のグループの援助によって、離れた村や熱帯雨林に暮らす職人および農民は自分たちの生産品をインターネットにオンラインし、高品質で公正な取引で成長している市場にアクセスしている。

photos: Global Exchange



3. Twinning 縁結び

「カバで関係を結ぶって？」これは、カナダのカルガリー動物園のスタッフが、まさに実行したひとつの方法だが、ガーナの地方局に少額の助成金を出して、ウェチャウ・コミュニティ・カバ保護区域を設立したことだ。これが双方の長期間にわたる協力関係の始まりだった。カバ保護区は環境を保護し、地方の若者に職を与え、そして地方の職人に収入をもたらす。自然保護区をつくるために、動物園から地方局に渡された小規模の助成金から始まったこの企画は、実質的な協力の形をとった数多いパートナーシップへの縁結びの一例にすぎない。こうした協力関係は、いまや北と南のあいだで、学校や病院、教会、地方自治体、村や都市とのあいだで、ひいては先進国と途上国の都市や国家のあいだで広まっているのだ。



photos: Donna Sheppard, Calgary Zoo

4. Contract and converge 縮小し、収束する

もと大道芸人であり、コンサート・バイオリニストのオーブリー・メイヤーは、気候変動への取り組みを前進させる方法として、ますます声高に叫ばれている南北間の協力のための計画を立案した。それは「縮小と収束」と呼ばれ、地球上のすべての人に、地球温暖化のいちばんの原因となっている二酸化炭素を割り当てによってみな同じだけ排出する(ただし減らしていく)権利があると予想するものだ。数十年という歳月をかけて、豊かな国も貧しい国も、人々が排出する二酸化炭素の量を少しずつ収束していけば、全体の汚染量は安全量にむかって縮小していくはずだ。科学者や経済学者、宗教のリーダーや政党、さらには世界中の政府でさえも、この案をひとつの適切な解決策としてとりあげている。

Aubrey Meyer



5. UN volunteers

国連のボランティアたち

「彼らこそが」——と、コフィー・アナン国連事務総長は語る、「国連の真髄を端的にあらわしているのです」。その3万人以上の国連ボランティアは、70%が開発途上国から、30%が裕福な国から来ており、140以上の開発途上国と東ヨーロッパ諸国で平和と開発のために活動している。それら無数のプロジェクトは、パレスチナ女性のための職業訓練から、ブータンの国立地理情報システムの実施、東ティモールの診療所への人員派遣にまでおよんでいる。ボランティアの多くは、活動期限が切れたあとも開発のために仕事を続けている。デーン・ムロジは、モルディブで小規模企業家向けに通信システムの開発を2年あまり行なったのち、祖国ザンビアに戻り、同じようなプロジェクトを立ち上げている。



photos:UN Volunteers/Andrew Smith

6. Debt-for-nature

債務を自然保護のために

開発途上国は、しばしばその国の自然環境や種を破壊してまで、多額の国際的な債務を返済している。しかし、「自然保護債務スワップ (debt-for-nature swaps)」は、その過程を逆転させる。20年以上も前に、当時WWF-US (=世界自然保護基金アメリカ)の副会長だったトム・ラブジョイ博士によって考案された債務と環境の交換は、自然保護団体に国の民間債務の一部を大幅に安い価格で買い取ってもらい、かわりにその資金を、森林やその他の大切な生態系を保護するための地域プロジェクトにあてさせるというものだ。コンサベーション・インターナショナル (Conservation International = 国際的な自然保護団体) とボリビアとのあいだで最初のスワップが行なわれてから、20カ国以上がこの制度を利用している。総額で37億5千万ドルもの債務がこの方法で相殺され、12億5千万ドルという資金が環境保護のために使われた。



UNEP / Jakub Jasinski



Practical Action / Upendra Shrestha



Practical Action/Annie Bungeroth

7. Practical Action 実用的な行動

「プラクティカル・アクション」と名前を変えたその団体は、名前がそのすべてを語っている。過去40年にわたり「中間技術開発グループ」と呼ばれていたこの団体は、開発途上国で草の根レベルの地域の人々とともに働き、伝統的な技術より生産性が高いが、先進工業国で使われている技術ほど費用がかからない中間的な適正技術を導入してきた。『Small is Beautiful』の著者E.F.シューマッハが設立したこのプラクティカル・アクションは、人々がみずから自分にふさわしい解決策を見いだせるように働きかけている。例としては、ネパールの山岳地の移動手段として重力を利用したロープウェイを取り付けたこと、スーダンの金属工を教育して荷馬車の車輪づくりをさせたこと、パルーの農業情報のデータベースのオンライン化を導入したこと、そしてスリランカの村に電気を供給するために複数の超小型水力発電機を設置したことなどがある。

南北間の協力

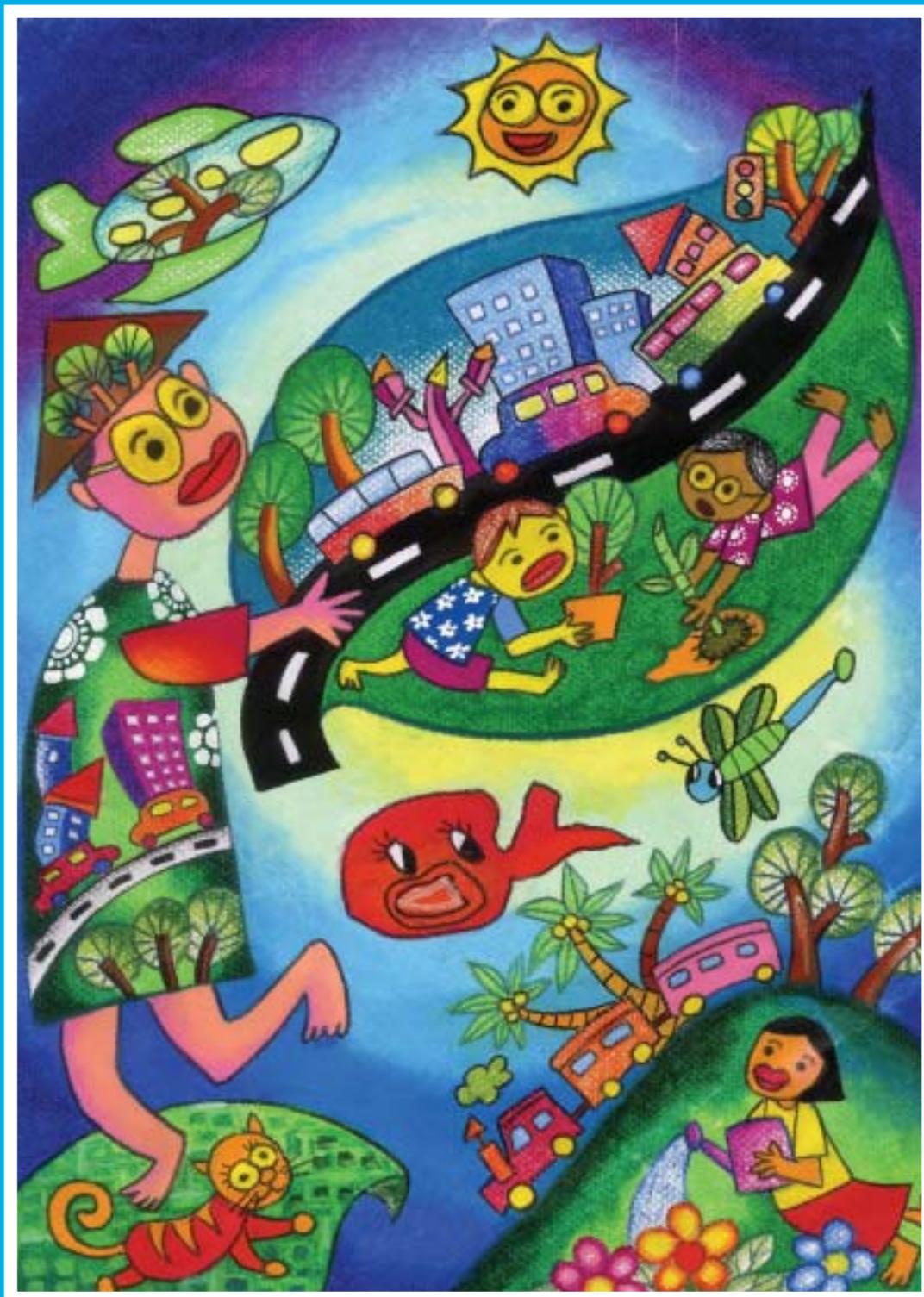


Practical Action/Zul

SEVEN

WONDERS

TOMORROW'S WORLD 明日の世界はどんなだろう？



60カ国・1万人の子どもたちが、明日の世界について描いた未来像をわかしあった。UNEPとバイエル社が提携して、青年環境プロジェクトのために開いた第14回「国際子供環境絵画コンテスト」を通じてのことだ。上の絵は、アジア太平洋地域で受賞したインドネシアのマハディ・ヌルチャヨ(Mahdi Nurcahyo)さんの作品。